

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：32705

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K13176

研究課題名(和文)モラルジレンマを用いた「考え議論する道德」授業に関する縦断的研究

研究課題名(英文)A longitudinal study on moral lessons involving thinking and discussing with moral dilemma

研究代表者

藤澤 文(Fujisawa, Aya)

鎌倉女子大学・児童学部・准教授

研究者番号：40633623

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文): モラルジレンマ討論を「考え、議論する」道德授業の教授法の1つとして提案し、中学生を対象として縦断研究を行った。

その結果、以下の3点を成果として挙げる。「考え、議論」できる道德授業の実施方法について提案した。社会性、道德性、考え、議論する力について縦断研究を行うことにより、小学生から中学生にかけての発達を明らかにすることができた。今後はこれらの知見を活かして、「考え、議論する」道德授業や道德教育の改善に努める。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2018年から実施されている「考え、議論する」道德授業を実施できるように、「考え、議論する」ことのできる教授法のひとつとして、モラルジレンマ討論を取り上げた。同時に、他国の道德授業との比較も実施した。また、「考え、議論する」ことのできる道德授業を受けている生徒を対象として、道德性および考え、議論する力について縦断的研究を行った。これらにより、「考え、議論する」道德授業を実施する際に工夫をする点、3年間にわたる生徒の発達を明らかにすることができた。これらの知見は、すでに一部は取り組まれているが、今後の教材やテキストの開発、研修や教員養成科目の改善に生かしていくことで、社会還元を目指す。

研究成果の概要(英文): I proposed a discussion on moral dilemmas as a teaching method for “thinking and deliberating” on moral education classes and conducted a longitudinal study with students.

The results evinced the following points: (1) the proposal of an implementation method for “thinking and deliberating” on moral education classes, and (2) a clarification of the development from elementary to junior high school through a longitudinal study on sociality, morality, and thinking and deliberating skills.

研究分野：教育心理学

キーワード：「考え、議論する」道德授業 中学生 国際比較 縦断的研究 フィンランド 特別支援学級 特別支援学級 教材開発

## 1. 研究開始当初の背景

学習指導要領の改訂にあたり、「考え、議論する」道徳授業をどのように行うかが様々な立場から議論されている。しかし、従来の道徳授業（国内外問わず、心情の読み取りが多かった）とは異なる、考えたり、議論したりすることを活性化させるための教授法や新しい道徳的教育課題に対応した教材は少なく（藤澤・内藤，2015）、その効果も実証的に検討されてはいない。そこで、子どもたちが多様な考え方や価値について広く議論し、考えを深めることのできる教授法や教材を開発することが早急に必要とされる。さらに、「考え、議論する」道徳授業が始まったのは2018年であり、考えたり、議論したりする子どものスキルやその発達は十分には明らかにされてはいない。そのため、「考え、議論する」ことのできる教材の開発に先立ち、これらのスキルの発達を明らかにする必要がある。

ところで、日本の道徳教育は、教員養成に関しては大学の教職課程、教員研修は都道府県市区町村の教育委員会、実際の道徳授業は学校に任されて、包括的に研究されている（永田・藤澤，2010a，2010b，2012）。そこで、本研究では、道徳授業および道徳性、社会性および考え、議論する力の発達を対象として検討する。

永田・藤澤（2012）は北海道から沖縄までの小学校・中学校教師3,500名程度（回収率=35.8%）を対象とし、これまでの道徳授業（以下、従来型道徳授業）においてどのように道徳授業が行われているかを調査している。その結果、小中学校ともに話合いやロールプレイが最も多く用いられていることが明らかにされた。よって、従来型道徳授業では他者の心情を考えたり、他者視点を取ったりすることが可能であったと考えられる。

一方、「考え、議論する」道徳授業の実施を考えると、中学生が従来型道徳授業の中で十分に考えたり、議論したりすることができているか、他者の心情を考えることが困難な非定型発達児に対応した道徳授業ができているかの2点において検討の余地が残される。について、従来型道徳授業における話合いでは、道徳性や規範意識が低下するという発達段階を迎える中学生（藤澤，2009，藤澤，2015）はほかの学年と比べ、話合いにおいて自分の考え（発話）を産出しにくく、議論が活性化されない可能性がある。について、国内外において従来型道徳授業では心情の読み取りが重視されてきているが、発達には多様性があり、人の心を推論したり、人の心について考えたりすることが困難な子ども（非定型発達児）があり、それらの子どもに対応した道徳教材が作成されてはいないことが明らかにされる（Senland & Higgins-D'Alessandro，2013）。そこで、今まで以上に発達の多様性も考慮した道徳授業を検討する必要があると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究では、第一に、中学生（特別支援学級の生徒を含む）を対象とし、道徳性や社会性および考え、議論する力の発達について、縦断研究を行うことにより、発達の方向性を明らかにする（研究1）。第二に、それらの発達に基づき、ある価値について自分自身を含め、様々な他者視点や道徳の発達段階が異なる考え方について広く考え、議論することのできるモラルジレンマ討論（以下、MDD）を参照することにより、道徳教材を開発し、「考え、議論できる」授業の進め方を提案する（研究2）。

## 3. 研究の方法

### 研究1の方法

参加者：X年に、首都圏の公立中学校に在籍する中学1年生（X年入学）、2年生（X-1年入学）、3年生（X-2年入学）、X+1年に在籍する、1年生（X+1年入学）、2年生（X年入学）、3年生（X-1年入学）、X+2年に在籍する1年生（X+2年入学）、2年生（X+1年入学）、3年生（X年入学）であった。具体的には、1年生に関して、X年入学141名（女子=67名）、X+1年入学165名（女子=79名）、X+2年入学129名（女子=69名）であった。2年生に関して、X-1年入学120名（女子=70名）、X年入学132名（女子=63名）、X+1年入学159名（女子=74名）であった。3年生に関して、X-2年入学146名（女子=71名）、X-1年入学121名（女子=70名）、X年入学131名（女子=63名）であった。なお、調査の回答不備のものは除外している。

手続き：毎年、一度、同じ時期に、授業中に担任教諭により、質問紙調査が一斉に実施された。研究の実施に先立ち、研究倫理審査を受けた。その後、研究協力校の校長に本研究の趣旨を説明し、本研究への協力の同意を得た。続いて、研究協力者の保護者に本調査について文書で説明し、同意のない家庭を協力者から除いた。さらに、研究実施時にも協力者に対し、本研究への参加の有無を尋ね、不参加と回答した生徒を本調査対象者から除いた。なお、特別支援学級の結果は対象者が限定的になるため、本報告書から除外されている。

### 調査内容：

多次元共感性尺度（Davis，1983）：Davis（1983）により開発された多次元共感性尺度の日本語版（桜井，1988）が使用された。この尺度は視点取得、想像、共感および苦痛の4つの下位尺

度から構成されており、全部で 28 項目である。これらの項目について、4 件法で回答が求められた。各項目について、「当てはまらない」から「当てはまる」に 1 点から 4 点が割り当てられた。

簡易版中学生・高校生用社会的視点取得検査(荒木・松尾, 2017): 荒木・松尾(2017)により開発された簡易版中学生・高校生用社会的視点取得検査が使用された。本検査は見開き 1 頁からなり、左面にモラルジレンマストーリー、右面に質問項目と選択肢が掲載されている。

コミュニケーションスキル尺度(上野・岡田, 2006): この尺度は、聞く話す、非言語、アサーションおよび話し合いの 4 つの下位尺度から構成される。各項目に対して、当てはまらないに 0 点～当てはまるに 3 点が割り当てられた。

得点化:

多次元共感性尺度(Davis, 1983): 視点取得、想像、共感、苦痛の 4 つの下位尺度ごとに合計得点が算出された。 $\alpha$  係数に関して、因子の順に、.62, .66, .52, .71 であった。得点が高いほど、各因子の要素を持っていることを示す。

簡易版中学生・高校生用社会的視点取得検査(荒木・松尾, 2017): 本検査の採点マニュアルに従い、下記の通り、得点が割り当てられた。1.8 点, 2.2 点, 2.5 点, 2.8 点, 3.2 点, 3.5 点, 3.8 点, 4.2 点, 4.5 点, あるいは 4.8 点であり、得点が高いほど社会的視点取得能力が高いことを示す。

コミュニケーションスキル尺度(上野・岡田, 2006): マニュアル(上野・岡田, 2006)に従い、聞く話す、非言語、アサーションおよび話し合いの 4 つの下位尺度ごとに合成変数が算出された。得点が高いほど、それぞれの因子の要素を強く持つことを示す。

### 研究 1 の結果と考察

3 年間の協力者の多次元共感性、社会的視点取得能力、コミュニケーションスキルの各下位尺度得点について分析した。

#### 多次元共感性

各学年別に、各下位尺度得点を従属変数、入学年および性別を独立変数とした二要因の分散分析を実施した。その結果、1 年生に関して、入学年には有意差があった(視点取得:  $F(2, 378) = 12.1, p > .001$ ,  $\eta^2 = .06$ ; 共感:  $F(2, 378) = 5.3, p > .01$ ,  $\eta^2 = .03$ )。Bonferroni 法を用いた多重比較の結果、視点取得と共感が有意であった(視点取得:  $p > .01$ ; 共感:  $p > .05$ )。視点取得に関して X 年入学と X + 2 年入学の生徒は X + 1 年入学の生徒よりも得点が高かった。共感に関して、X + 1 年入学の生徒は X + 2 年入学の生徒よりも得点が高かった。性差についてすべてが有意であり(視点取得:  $F(1, 378) = 14.7, p > .001$ ,  $\eta^2 = .04$ ; 想像:  $F(1, 378) = 32.5, p > .001$ ,  $\eta^2 = .08$ ; 共感:  $F(1, 378) = 6.2, p > .05$ ,  $\eta^2 = .02$ ; 苦痛:  $F(1, 378) = 9.5, p > .01$ ,  $\eta^2 = .03$ )、男子よりも女子において得点が高かった。2 年生の入学年に関して、視点取得が有意差であった( $F(2, 370) = 3.5, p > .05$ ,  $\eta^2 = .02$ )。Bonferroni 法を用いた多重比較の結果、有意であり( $p > .05$ )、X - 1 年入学の生徒は X 年入学の生徒よりも得点が高かった。性差についてすべてが有意であり(視点取得:  $F(1, 370) = 17.2, p > .001$ ,  $\eta^2 = .05$ ; 想像:  $F(1, 370) = 20.2, p > .001$ ,  $\eta^2 = .05$ ; 共感:  $F(1, 370) = 11.0, p > .01$ ,  $\eta^2 = .03$ ; 苦痛:  $F(1, 370) = 21.6, p > .01$ ,  $\eta^2 = .06$ )、男子よりも女子において得点が高かった。3 年生に関して、性差についてすべてが有意であり(視点取得:  $F(1, 375) = 34.7, p > .001$ ,  $\eta^2 = .09$ ; 想像:  $F(1, 375) = 25.6, p > .001$ ,  $\eta^2 = .07$ ; 共感:  $F(1, 375) = 7.4, p > .01$ ,  $\eta^2 = .02$ ; 苦痛:  $F(1, 375) = 7.9, p > .01$ ,  $\eta^2 = .02$ )、男子よりも女子において得点が高かった。これらの結果より、男子よりも女子において共感性のいずれの側面も高いことが示唆された。一方、新教授法開始以前の 2 年生において視点取得の得点が高いことから、道徳授業における心情の読み取りのウエイトが低下している可能性が示唆される。社会的視点取得能力

学年別に、社会的視点取得能力得点を従属変数、入学年と性別を独立変数とした二要因の分散分析を実施した。1 年生について、性別の主効果が有意であり( $F(1, 435) = 4.0, p > .05$ ,  $\eta^2 = .01$ )、男子よりも女子において得点が高かった。入学年の主効果に有意差はなかった。2 年生について性別の主効果が有意であり( $F(1, 411) = 3.9, p > .05$ ,  $\eta^2 = .01$ ) 男子よりも女子において得点が高かった。入学年の主効果に有意差はなかった。3 年生について入学年×性別の交互作用、入学年、性別が有意であった(交互作用:  $F(1, 398) = 3.1, p > .05$ ,  $\eta^2 = .02$ ; 入学年:  $F(2, 398) = 2.4, p > .10$ ,  $\eta^2 = .02$ ; 性別:  $F(1, 398) = 20.6, p > .01$ ,  $\eta^2 = .05$ )。そこで、入学年について単純主効果の検定を行った結果、男子において有意であった( $F(2, 194) = 3.6, p > .05$ ,  $\eta^2 = .03$ )。Bonferroni 法を用いた多重比較の結果、X - 2 年度入学よりも X - 1 年度入学において得点が高かった( $p > .05$ )。

これらの結果より、性別に関して社会的視点取得能力は男子よりも女子において高いことが明らかになり、藤澤(2019)の結果が再現された。一方、入学年に関して、考え議論する道徳授業開始年よりも後の入学生において、社会的視点取得能力の高い傾向が男子においてみられた。この結果は女子においては見られなかった。しかし、女子の方が男子よりも高得点であったことから、女子において社会的視点取得能力が伸びていないのではなく、天井効果がみられていた可能性が残される。これらの結果より、考え議論する道徳授業に教授法を変更したのちも、「心情の読み取り」に関して能力は同じように育まれていることが示唆される。

## コミュニケーションスキル

学年別に、入学年および性別を独立変数とした二要因の分散分析を行った。その結果、1年生はすべての下位尺度において、学年差はなかった。非言語において、男子よりも女子において得点が高かった ( $F(1, 410) = 36.5, p > .001$ , 偏<sup>2</sup> = 0.1)。2年生は、非言語、アサーション、話し合いにおいて有意であった (非言語:  $F(2, 389) = 3.3, p > .05$ , 偏<sup>2</sup> = .02; アサーション:  $F(2, 389) = 4.5, p > .01$ , 偏<sup>2</sup> = .02; 話し合い:  $F(2, 389) = 4.0, p > .05$ , 偏<sup>2</sup> = .02)。Bonferroni法を用いて、多重比較を行った結果、アサーションと話し合いが有意であった (アサーション:  $p > .05$ ; 話し合い:  $p > .05$ )。アサーションはX-1年入学よりもX+1年入学とX年入学において高かった。話し合いはX-1年入学よりもX年入学において高かった。性別に関して、非言語では男子よりも女子において得点が高かった ( $F(1, 389) = 4.8, p > .05$ , 偏<sup>2</sup> = 0.01)。3年生に関して、入学年と性別の交互作用が有意であった (聞く話す:  $F(2, 373) = 3.5, p > .05$ , 偏<sup>2</sup> = .02; 非言語:  $F(2, 373) = 4.1, p > .05$ , 偏<sup>2</sup> = .02; アサーション:  $F(2, 373) = 4.8, p > .01$ , 偏<sup>2</sup> = .03; 話し合い:  $F(2, 373) = 4.3, p > .05$ , 偏<sup>2</sup> = 0.02)。以上の結果より、1年生は入学年による差はなく、小学校6年生までに身に着けているコミュニケーションスキルに関して入学年度による違いがないことが明らかにされた。2年生はX-1年入学よりも考え議論する道徳授業開始後 (X年入学およびX+1年入学) に入学した生徒において一部のコミュニケーションスキルが高くなっており、考え議論する道徳授業の教育的効果があることが示唆される。一方、3年生は入学年による差はなく、考え議論する道徳授業の教育的効果は示唆されなかった。これらの結果より、開始した年度よりも、2年生という発達時期に考え議論する道徳授業の効果がある可能性が示唆された。

## 研究2の方法

### 手続き

教科書・専門書の分析：国定教科書として出版される道徳教科書 (8出版社×3学年) に目を通し、どのようなストーリーが扱われているか、どのような内容項目が取り上げられる傾向にあるかを調査した。また、教師や教職学生が「考え、議論する」道徳授業を行えるようになることを目的として市販されている道徳授業関連のテキストや補助教材を収集し、どのような補助教材が必要とされているか、どのような内容項目が取り上げられているかについて調査した。

道徳授業の観察：定期的に中学校および特別支援学級の道徳授業を参観した。教室後方にデジタルビデオカメラが設置され、黒板および教師、そして生徒の声を中心に録画された。すべての録画は発話プロトコルが作成されたが、だれがどの発話をしたかはわからないように、ナンバリングがなされた。本研究の実施に先立ち、本学の倫理審査を経た後に、学校、教師、保護者に説明がなされ、同意した人のみ、本研究の対象者とされた。

分析および教材作成の方法：文献調査及び授業参観の結果をもとに、MDDの形式を用いて、モラルジレンマ教材の試作を行った。また、高校生の「公共」向けのモラルジレンマ教材の試作を行った。教材開発には、モラルジレンマを用いたストーリーの作成だけではなく、指導案サンプル、板書案、補助資料 (絵や図版) の開発も同時に行った。これらについて、教職学生を対象として、模擬授業を実施し、実際の使用に耐えうるか検証を行った。必要に応じて、ストーリー、指導案サンプル、板書案、補助資料 (絵や図版) の修正を行った。また、現職の教職関係者からコメントを求め、さらに修正を行い、実際の授業で使用できるように修正をした。

## 研究2の結果

小学生を対象とした、MDDの形式を用いたモラルジレンマ教材を出版した (久保田・藤澤, 2019)。また、高校生を対象とした、「公共」向けの教材を出版した (藤澤, 2019)。そして、「考え、議論する」道徳授業の進め方について、Figure1およびFigure2に示したように、道徳授業の初学者および経験者向けにモデルを提案した (藤澤, 2019)。なぜならば、導入が長すぎたり、授業時間内にまとめまでを終えることができなかつたりする道徳授業が見られたため、おおよその授業展開について参照することができる指標が求められると判断されたからである。これにより、「考え、議論する」道徳授業の進め方や時間配分などについてどうすればよいか困っている教師 (道徳授業初学者) には授業を進めるための目安としてもらうことができると考えられる。なお、このモデルは現職教師の道徳授業初学者だけではなく、教職課程に在籍する、これから道徳授業を実施することになる教職学生にも参照してもらうことができるように作成している。

## 4. 研究成果

本研究では、第一の目的は、中学生 (特別支援学級の生徒を含む) を対象とし、道徳性や社会性および考え、議論する力の発達について、縦断研究を行うことにより、発達の方向性を明らかにすることであり (研究1)、部分的にも明らかにすることができた。第二の目的は、それらの発達に基づき、ある価値について自分自身を含め、様々な他者視点や道徳の発達段階が異なる考え方について広く考え、議論することのできるモラルジレンマ討論 (以下、MDD) を参照し、道徳教材を開発することにより、「考え、議論する」ことのできる授業の進め方を提案することであった (研究2)。研究助成期間に得られたこれらの研究知見について、専門書、教科書、教材、辞典、論文を刊行し、社会還元に努めた。

Figure1 : 「考え，議論する」道徳授業の流れ（経験者用）



Figure2 : 「考え，議論する」道徳授業の流れ（初学者用）



## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 藤澤文	4. 巻 14
2. 論文標題 園児はペアの種類により協同問題解決が異なるか？：小学校低学年における「考え議論する」道徳授業へのインプリケーション	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 道徳性発達研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Fujisawa, A.	4. 巻 14
2. 論文標題 Developmental changes in junior high and high school students' social perspective-taking ability	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Japanese journal of educational practices on moral development	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Fujisawa, A.	4. 巻 -
2. 論文標題 A cross-sectional study on the ability of junior high and high school students to acquire social perspectives: Focusing on multidimensional empathy scale and social perspective-taking acquisition test.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The 2020 Kansei engineering and emotion research proceedings.	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Fujisawa, A.	4. 巻 13
2. 論文標題 Developmental change of social capacity related to morality: behavioral standards and multidimensional empathy of junior high school, high school and university students.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Japanese journal of educational practices on moral development	6. 最初と最後の頁 22 - 27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤澤文	4. 巻 11
2. 論文標題 高校生・大学生を対象としたモラルジレンマ課題を用いた討議の教育的効果の検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 道徳性発達研究	6. 最初と最後の頁 11 - 22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤澤文	4. 巻 11
2. 論文標題 討論は道徳に関する社会的能力を変容するか? : 討議とディベートの比較	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 道徳性発達研究	6. 最初と最後の頁 23 - 35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Fujisawa, A.	4. 巻 12
2. 論文標題 An investigation into the continuity of the educational effects of deliberation in university students.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Japanese journal of educational practices on moral development	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計24件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 15件)

1. 発表者名 Fujisawa, A.
2. 発表標題 Do moral dilemma classes and ordinary moral classes encourage thinking and deliberating?: Focusing on the blackboard and class processes
3. 学会等名 International Conference on Moral Psychology 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Fujisawa, A.
2. 発表標題 The possibility of online teaching as a teaching method for moral lessons in “moral teaching methods” courses: A preliminary study
3. 学会等名 Taiwanese Psychological Association (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Fujisawa, A.
2. 発表標題 Development of social skills in junior high school: A 3-year longitudinal study
3. 学会等名 46th Annual Conference of the Association for Moral Education (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Fujisawa, A.
2. 発表標題 "Thinking and Deliberating" Moral Lessons: A Preliminary Survey of Moral Education Leaders
3. 学会等名 International Conference on Designing Effective Instruction (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大久保智生, 藤澤文ほか
2. 発表標題 「失敗から学ぶ研究、教育、地域貢献、運営」
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会経常的研究交流委員会企画オンラインシンポジウム
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 藤澤文
2. 発表標題 教職学生は希望する免許種により、「考え、議論する」道徳授業において重視する教授スキルが異なるか?：小学校，中高等学校，養護教諭免許希望者の比較
3. 学会等名 日本教育工学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Fujisawa, A.
2. 発表標題 Communication skills and moral development, and gender differences between elementary and middle school students.
3. 学会等名 International Psychological Applications Conference and Trends 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Fujisawa, A.
2. 発表標題 Social development of junior high school students enrolled in special needs classes
3. 学会等名 32nd International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Fujisawa, A.
2. 発表標題 Development of Communication Skills and Morality among Japanese Junior High and High School Students and their Relationships
3. 学会等名 World Education Research Association (WERA) 2021 Virtual Focal Meeting (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Fujisawa, A.
2. 発表標題 Does the Public Space Standard follow a U-shaped development among elementary to university students?
3. 学会等名 42nd Annual Conference of the International School Psychology Association (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Fujisawa, A.
2. 発表標題 Development and gender differences of behavioral standards for elementary and junior high school students
3. 学会等名 The Asia Pacific Network for Moral Education (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Fujisawa, A.
2. 発表標題 Predicting the deliberation skills of middle school students: A comparison of general and special support classes
3. 学会等名 The 5th Annual Conference on Academic Research in Education (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤澤文
2. 発表標題 園児はペアの種類により協同問題解決が異なるのか？
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Fujisawa, A.
2. 発表標題 Developmental change in social emotional skills related to morality
3. 学会等名 Association for moral education (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤澤文
2. 発表標題 協同問題解決場面における園児ペアの発話
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤澤文
2. 発表標題 教職科目「道徳の指導法」の中の「道徳授業の教授法」の講義方法に関する研究：講義型かあるいは参加型か？
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤澤文
2. 発表標題 教師は「考え、議論する」道徳授業を実施するための教員研修において何を期待するか？
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Fujisawa, A.
2. 発表標題 Development of multidimensional empathy in Japanese junior high and high school students: A cross-sectional study
3. 学会等名 The 2020 International Conference on Kansei Engineering and Emotion Research 2020年9月 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Fujisawa, A.
2. 発表標題 Comparison of junior high school moral education: Japan and Finland
3. 学会等名 Annual conference of Asia-Pacific network for moral education (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤澤文
2. 発表標題 中学校の道徳授業におけるモラルジレンマ授業と通常授業の比較
3. 学会等名 日本教育工学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Fujisawa, A.
2. 発表標題 Examination of moral education involving thinking and discussing
3. 学会等名 International school psychology association conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Fujisawa, A.
2. 発表標題 Longitudinal study on morality of junior high school students: targeting behavioral standards
3. 学会等名 World education research association conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山口剛、藤澤文
2. 発表標題 中学生の社会的情動スキルの発達
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤澤文
2. 発表標題 中学生の社会的視点取得能力と討論スキルの発達
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第28回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 細尾萌子, 柏木智子, 藤澤文ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 408
3. 書名 小学校教育用語辞典	

1. 著者名 Pracana, C., Wang, M., Fujisawa, A. et al.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 inScience Press	5. 総ページ数 482
3. 書名 Psychological Applications and Trends 2021	

1. 著者名 荒木寿友・藤澤文編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 道徳教育はこうすれば もっと おもしろい: 未来を拓く教育学と心理学のコラボレーション	

1. 著者名 榎本淳子・藤澤文編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 210
3. 書名 エビデンスベースの教育心理学: 心身の発達と学習の過程	

1. 著者名 原 清治、春日井 敏之、篠原 正典、森田 真樹、荒木 寿友、藤井 基貴、藤澤文ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 248
3. 書名 道徳教育	

1. 著者名 大久保 智生、牧 郁子、藤澤文ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 162
3. 書名 教師として考えつづけるための教育心理学	

1. 著者名 谷田貝公昭、大沢 裕、中島朋紀、藤澤 文ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 一藝社	5. 総ページ数 156
3. 書名 新たな道徳教育の創造	

1. 著者名 西村 純一、平野 真理、藤澤文ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 156
3. 書名 生涯発達心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

藤澤文 <a href="https://www.acoffice.jp/kmwuhp/KgApp?kyoinId=ybdbgdymggy">https://www.acoffice.jp/kmwuhp/KgApp?kyoinId=ybdbgdymggy</a>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------